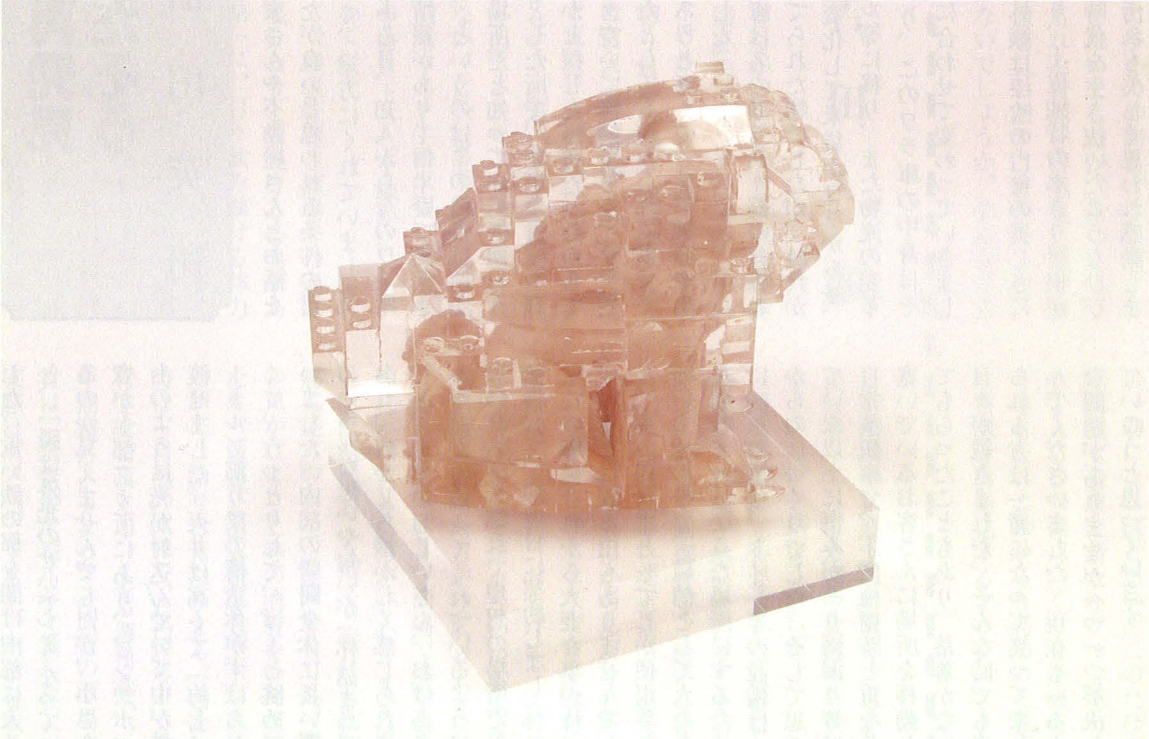
子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2006年11月　NO.134



「wooden deck tan/seesaa」 上村　卓大

〈もくじ〉

街のうもれた資源を再発見　新たな価値を見いだそう…… 信田英司　2
酒場を楽しむ…… 吉田　類　3
地域に愛される芸術文化スペースを目指して…… 北　泰子　4～5
鏡 女のまつり …… 高橋清子　5～6
高知街ラ・ラ・ラ音楽祭は「お祭り」です…… 吉澤文治郎　7
高知の女性の生活史
「ひとくちに話せる人生じゃあない」はこうしてできた
～地域を歩いて聞き取りをしてⅠ～…… 筒井征子
～地域を歩いて聞き取りをしてⅡ～…… 依光浩美　8～9
ロハスと私…… 笹岡里圭　10～11
先人の知恵に挑め！…… 徳平　晶　12
9～10月の事業のご報告…… 13
風俗歳時記・風伯…… 14～15

(財) 高知市文化振興事業団

街のうもれた資源を再発見 新たな価値を見いだそう

信田英司

アート系雑貨とギャラリーのあるショップ、グラフィティの新たな拠点は、江ノ口川沿いにある「高知縣藁工倉庫」にあります。この藁工倉庫は有限会社イケダを経営する池田文七さんのお父さんが昭和三十八年に五年の歳月をかけて造られた白壁の藁倉庫です。一文橋の東西に分かれて点在し、「地球33番地」の近くにあることもあり、愛称「ワラ庫」として結構有名です。グラフィティは橋の西側に位置し、店舗南側の江ノ口川沿いには遊歩道もあり最高のロケーションです。時代をタイムスリップしたような味わいのある風景で、他にはなかなか見あたらない良い所だと思っています。本当によくぞ残してくれたものと池田さん親子に感謝しています。

去年の暮れに北高見町の拠点からこの地に移転するまでの半年間に、市内くまなく可能性のある場所や建物を色々探しました。多くの仲間や知人からの情報を元に現地に出向き、大家さんや不動屋さんとお話をしましたが良いと思われる条件の建物がなく、途方にくれていました。四月のある日、知人から今のワラ庫の空き情報があり半信半疑で出向きました。というのはこの地帯は前から良い場所だと知っていて何回もうろうとした所で、空いた倉庫や蔵が無いかと探した場所だったからです。マタ空いて無いやろう、マタ空いていたとしても借りられる家賃やないやろうと考えて、重い気分で出向きました。

ワラ庫は名の通り元々藁の倉庫として建てられた物でしたが、時代が次々と変化して米袋がワラから紙、ビニール等に移り、また物流の変革も加わり、このワラ庫の中身はその時代に合わせて変わっていきました。

まず外観は漆喰の白壁の美しさにうっとり、土佐独特の水きり屋根があり、時代を生き抜いたようなひび割れや汚れも美しく思われ感動しました。重い鉄の扉を開け内部に入ると、一瞬は外光のせいでどうなっているのか見えませんでしたが、小さな窓が上部二カ所にあり、ピンスポットのように光が射込んでいて中が見渡せました。天井は高くて（約七メートル）飾り梁の構造体がすばらしくて、うっとりして、ぼ～と眺めていました。内部の空間全体に長い間のいろんな思いや匂いが一杯詰まっており、何かしら懐かしく感じられました。古里のおじいさん、おばあさんが温かく迎えてくれているように思われ、一目惚れで理想の場所だと確信して、即翌日に契約しました。

この時はそれから大変な事が待っているとは知る由もありませんでした。長い間倉庫としてしか使用されていませんので、店舗として人たちを楽しませるような場所にするために、水や電気、トイレ等の設備は一からの店づくりでした。そして思っていた以上に傷みがあり雨漏り等は日常茶飯事で、丁度梅雨時と重なり寛いでいるお客さんに場所を移動してもらったこともあり、落着かない日々が続きました。そんな時でも来られる方は一緒になって笑って楽しんでくださいました。現在もいろんな問題がありますが一つ一つ解決していこうと思っています。

そんなグラフィティですが多くの方がいらしてくださって、まだ悪い印象を聞いたことがありません。外観や中もいい味が出ていてゆったりと寛げます。特にお薦めなのが南側の江ノ口川周辺の風景です。川風を感じながら、市の中心部に日が落ちていくのを目にする時など、ここが高知ということも忘れるほどいい時間が過ぎていきます。

このようなかけがえのない街並みや風景が高知にはまだ残っていると思います。ただ私たちが気付かない間に多くの物が消えています。私たちＡＲＴ ＮＰＯ ＴＡＣＯが出版した「高知遺産」に掲載された建物や風景も時代の波によって無くなっています。「失う前にもう一度」を合い言葉に多くの仲間と、くまなく街の遺産を集めましたが、そのような街のうもれた資源を再発見して、新しい価値を見いだすことが今一番大切ではないでしょうか。そんな活動の一助になればと思い、このたび高知縣藁工倉庫に新たなグラフィティとＴＡＣＯの拠点づくりを進めて参りました。これからも高知のうもれた資源を再発見するプロジェクトを進めて参りますので、よろしくお願い致します。

（しのだえいじ／グラフィティ主宰・ＡＲＴ ＮＰＯ ＴＡＣＯ理事長）

酒場を楽しむ

吉田類

随筆業が生活の中心となって、ますます地方を巡るチャンスに恵まれている。もともと、イラストレーターの頃から旅好きだった所為（せい）で、各地の食や酒、人との出会いが楽しみだった。馴染みの無い町の横丁に迷い込んで、方言を肴に一杯やる。たまには酒量が度を越して後悔もあるけれど、おおむね癒される。

また、地域の経済事情を肌身で感じるには、酒場が恰好（かっこう）の環境かも知れない。職人、商社マン、農、漁業とあらゆる職種の人々と出会え、興味深い話が伺える。特に、雑誌編集者などとの付き合いは、ほとんどが酒場を介し、酒なくして仕事の展開も考えられなかった。元来、旅や酒場をテーマの執筆こそ我が天分と、密かな自負さえ抱いていた気がする。

それにしても、酒場エッセイを書き始めたのは、イラスト仕事の片手間にすぎなかった。まさか画業に費やす時間を失うほどとは予想していなかったけれど、いつしか雑誌原稿の締め切り日との競争が日常となった。とは言え、酒場取材ともなれば、酔って予定の狂う事態に陥ったりする。まして、記事に添える俳句は、全く異なるエネルギーを注がなければならない。一見、享楽的と思われがちな酒場ライターの反面、主催する句会や書き下ろしを疎かにしないよう努めている。

従って、健康管理と酒場での過ごし方に幾分なりとも長ける必要があった。第一に、日々飲み続ける体力の維持だ。なるべく歩く機会を多くし、飲み食いして摂取した栄養は消費する。登山する時間がままならぬ以上、肥満大敵、〝咳をしても腹筋〟という気の遣い方にも甘んじた。日頃、粗食に心がけ、味覚をシンプルかつ無垢の状態へ戻し置く。舌が美食に奢ってしまえば、食材への新鮮なイメージを損なうからだ。

酒も同じで、必要以上に飲むことはない。無論、勢い付いてしまった時は、あえて制御せず、酔いに任せる。本当は、これが一番怖い。酔ったからとて、他人にからんだりしないが、少々大らかとなりすぎて財布の紐が緩むらしい。おまけに、二日酔いの経験が二十年来ないから困る。本当は、懲りた方がいいのだろう。

それはさて置き、酒場では余計な神経を使わないのが肝心。まずは、いっさいの拘りを捨て、郷に入れば郷に従うつもりで暖簾をくぐる。店の見かけより上等の酒肴をいただけたり、風貌に似合わず誠実な人柄の店主と語り合えたりする。こんな時は、自然の流れで、気持ちよく取材させて貰える。ある週刊誌で、一年間続けたカメラマン同行の酒場取材は、全店がアポイント無しだった。実際は、スケジュール上、アポを取る余裕を持てないのが実情でもある。

ほぼ、そんな取材スタンスを十年近く続けてきたが、数え切れないほどの客や店主の笑顔に触れられたのは有り難い。

趣味から出た仕事のおかげで友が得られ、たとえ終わろうとする横丁飲食街にも、人間ドラマの詰まっていることを垣間見せていただけた。旅の喜びは、また喪失感を伴う。でも、体の許す限り旅人でありたい。

（よしだるい／酒場詩人）

吉田 類

一九四九年高知県高岡郡仁淀村（現吾川郡仁淀川町）に生まれる。シュール・アートの画家としてパリを中心に活動し、その後イラストレーターに転身する。

十数年前から酒場エッセイの執筆を始め、酒と旅をテーマにした著作として『東京立ち飲みクローリング』（交通新聞社）、『酒場歳時記』（日本放送出版協会）などがある。

また、俳人として俳句愛好会「舟」を主宰している。

地域に愛される芸術文化スペースを目指して

北　泰子

長年親しんでいただいた「土佐山田町立美術館」の名称が、今年三月一日の香美市合併により「香美市立美術館」となりました。名称変更後「香美市立美術館ってどこ?」とお問い合わせが多かったのですが、半年を過ぎ、やっと馴染んでいただけたようでホッとしております。

平成十五年四月に土佐山田町立美術館館長として就任した当時は、全国的に美術館は入館者数が減少し、閉館する館もあちこちに出始めていました。公立美術館の予算も大幅に削減されるという厳しい状況の中、生き残りをかけて、各館がさまざまな取り組みを始めている最中でした。

当館も年間の入館者数が大きく減少しており、早急に対策を立てる必要に迫られている状況でした。問題点は「美術館が地域の人々のニーズに応えられているか」「館内で入館者を待つという美術館の『待ち』の態勢」の二点にあるのではないかと考え、行動を起こすことにしました。しかし、急激な変化を良しとしない内部の大きな抵抗「前例のないことはしない」という壁にもぶつかることになりましたが、少しずつ周囲の理解を得て前進しはじめました。

美術館を盛り上げるための活動の一環として、まず地域の人々の美術館に対する要望や感想を聞くため、多くの方々とお会いすることから始めました。その中のお話でさまざまなことに気付くこととなりました。まず平成六年に当館が開館する前に、当時の町長（旧・土佐山田町）が地域の人々に対して「町民の利用できる館」をアピールしていたにも関わらず、完成すると町民も利用できず、作品展はもっぱら隣町の施設や高知市内のギャラリー等を借りなければならない状態でがっかりしたという感想。また町で美術館を建てることについては賛否両論があり、反対していた人々の中には「完成しても利用しない！」と一度も足を運ばない人もありました。近隣の高等学校や小・中学校の作品展の会場として希望しても貸してもらえなかったという声が多いことや、「敷居が高くて行きにくい」と感じている人も多いことなども分かりました。町立にも関わらず、町民に馴染まない美術館。町民が美術館がどこにあるかさえ知らないという事実も次第に分かってきました。地元の学校からの利用もほとんどなく、学校の先生自身も地元にある美術館に足を運んだことがない方がほとんどでした。

まず前年から準備されていた企画に「学校の総合学習支援」を入れ、学校へ展覧会のPRに回りました。また予定通り開催できなかった企画を「地域連携の企画」とし、書画の作品展示と地元の方々の応援をいただき、子供たちを対象としたワークショップを準備し、地域参加型の親しみやすい展覧会を目標として開催致しました。「これが美術館で見る作品なのか」との意見もある一方で、「こんな展覧会だと気軽に入りやすい」「初めて美術館に来ました」とおっしゃる来館者も多く、短期間でしたが町内の来館者を増加させる良い結果につながりました。

その後の企画展では国内外で活躍する作家の作品を紹介する一方、地元で活躍する作家の作品展示も行い、県内外の幅広い層の方々に来館していただき、美術館の存在を知ってもらいアピールする良い機会に恵まれました。

地元の小・中学校への働きかけとしても以下の活動への取り組みを新たに始めました。館での鑑賞教育への協力、休日の子供たちのためのアトリエ講座の開催、学校での作家によるワークショップ、鑑賞教育・造形教育支援の出前教室、学校の展示スペースに館所蔵の絵や版画を展示し、作品に親しんでいただく学校美術館。高齢者や障害者福祉施設でのワークショップや造形講座への協力など、館外活動にも力を入れ積極的な取り組みを行ってきました。

今年九月から十月にかけて「シベリアから平和を考える―宮崎進・角田和夫二人展」を開催しました。国際的に評価の高い日本を代表する作家の一人である宮崎進さんと、地元を代表する写真家の角田和夫さんによる、シベリアをテーマに制作された作品展では、多くの方々の助力を賜りました。作家のお二人はもとより、宮崎さんと親しく、準備段階からご協力をいただいていた高知女子大学助教授の青木淳先生の、ギャラリートークや公開講座、市内の遺族会の代表者とシベリア抑留体験者の「戦争から平和を考える」ギャラリートーク、香美市社会福祉協議会主催の「太平洋戦争当時の〝食〟を通した交流会の集い」の開催等、展覧会の関連企画として多くの方々のお力添えをいただきました。市内の学校からも「平和学習」の一環として、多くの小学生が来館し、遺族の方からのお話の会と作品鑑賞が実現しました。会期中、戦争や抑留体験者の方々の来館に加え、若者や親子での鑑賞者も多く見られました。

現在、入館者数も就任時と比較すると約二・八倍になり、今年度からは企画展のない時期に限って展示室も地元の美術振興のために貸し出すことが決まりました。すでに、一グループ展、一個展（遺作展）が開催され、また、来年一月には地元の高等学校の美術・書道展、市内小・中学校の生徒作品展も開催予定です。

地域に愛される「地域交流の芸術スペース」としての美術館を目標に、周囲の皆様方のご協力を得、積み重ねた努力が少しずつ形になってきたようです。

まだまだ美術館としてやるべき事、やれる事がたくさんあると感じています。今後も更に地域の皆様との連携を深め、幼児から高齢者、障害のある方々にも広く集まっていただける芸術文化の発信地としての役割を果たせるよう、努力していきたいと思っています。

最後になりましたが、日頃の皆様方の当館へのご支援・ご協力に心より感謝申し上げます。

（きたやすこ／香美市立美術館館長）

鏡　女のまつり

高橋清子

昭和から平成へと時代の替わった春の日の一日、こぢんまりとした「鏡村婦人の部屋」では新年度の鏡村婦人会の役員会が開かれていました。当時の金岡会長からの「まだまだ女性の地位の認められてない今、男女共同参画の問題に取り組んで学習し、婦人会員自らを磨くことが大切ではないろうかねぇ」という提案に、一同「賛成」です。

婦人会で一体何ができるの。楽しいことなら大好き。さて、どうしょう。その頃チラホラ聞かれだしていた「女のまつり」はどう？　誰かが発言。そうや、男達はよくおまつり騒ぎをして、女はいつも裏方でハイ、ハイと動くばかりです。そこで女もするなり「女のまつり」にと話は進み、鏡村女のまつり実行委員会を立ち上げ、準備に取りかかりました。

他の地域の女のまつりも勉強しながら、鏡村婦人会ならではの女のまつりを目指して各関係機関の皆様にご指導をいただき、私達の「鏡村女のまつり」を組み立てました。午前中は学校関係の発表等、続いて婦人会員による創作劇、昼食は会員の手作り弁当で一休み。午後は講演会で学習し、アトラクションで心身をほ

ぐして、最後は男性の手による皿鉢料理で祝賀会にと、準備も順調に進みました。

平成二年梅花の蕾もほころび始めた二月十一日、「めざせ、女性のエンパワーメントを」をテーマに「第一回鏡村女のまつり」の開幕です。講師にNHKの弘瀬久美子アナウンサーを迎え、垢ぬけた話術に聞き入ったことでした。創作劇は「鏡川の清流を守り、男女共立社会を築こう」で会員一同熱演でした。脚本から衣裳、舞台装置、照明と一切を会員の手で頑張りました。練習は夜間で、たった一言の台詞のためにご主人の車で送り迎えをしていただいた会員さんのことを今も忘れません。「女のまつり」が今まで続けられたのも、夫の協力のおかげであり、家族皆の温かい励ましがあったことに心より感謝します。

アトラクションでは会員による舞踊の発表をし、会場の皆様から大きな拍手をいただき、おひねりまで飛んで来て、スターになった気分でした。女のまつりの最後は皿鉢料理を囲んでの祝賀会です。男性の方は早朝より市場に買い出しに、また味つけにと大忙しのようでした。公民館や役場の男性職員の皆さんの「コーヒーいかがですか。チュウハイもあります。みつ豆もってきましょうか」と行き届いたサービスに、嬉しく頭の下がる思いでした。

回を重ね、第三回には、橋本高知県知事御夫妻もご参加くださり、温かく心に残る励ましのお言葉をいただきましたことは夢のようでした。

毎回盛会のうちに年月は経ち、市町村合併問題が浮上した時、私は婦人会長として、村による最後の回となる女のまつりの実行委員長を務めることとなり、戸惑うことばかりで不安でした。やるしかない。無鉄砲なハチキンパワーを全開し、皆様方からご指導をいただきながら、百十五年の鏡村の歴史に幕引きの「第十四回鏡村女のまつり」は、寂しさと新市への期待のうちに終わりました。

平成十七年、合併後初めての記念すべき「第十五回鏡女のまつり」を、岡崎高知市長のご参加を得て、開催することが出来ました。席上、市長よりの励ましのお言葉は、婦人会員だけでなく、地域住民一同に元気を与え、合併後の不安な心を温かく癒してくださいました。合併記念の回ということで、皆様から戴いたありがたい数々の御祝は、婦人会活動の原動力となりました。

新市となり内容も少し工夫し、構造改善センター全館をお借りして、文化活動の華展、書展、手芸展を開催し、また地域の曜市出店者の皆様のご協力でミニ曜市を開設して皆様に喜んでご利用いただきました。

今年「第十六回鏡女のまつり」では、鏡中学生による意見発表を行い、学校と地域の関係が一段と近くなった感じです。今回の創作劇は、鏡の特産品梅にスポットを当てた「梅太郎出世旅」で、会場は笑いでいっぱいのひと時でした。最後は第一回から続いている男性の手作りによる皿鉢料理を囲み、地域内外の皆様との有意義な交流ができましたことを嬉しく思い、会員一同次回女のまつりにファイトがわきました。

合併後の今、少子高齢化の進む鏡地域で私達女性の役割はますます重要となっています。男女共同の社会づくりに向けて心豊かな地域社会を目指し、世代、地域を越えた交流で明日の明るい地域づくりにと、頑張っています。

「女のまつり」を通して多くの皆様と交流のできますことを望みながら、「第十七回鏡女のまつり」へのご案内を致します。

開催日　平成十九年二月十一日
（建国記念日）
場　所　鏡地域構造改革センター

はりまや橋から車で三十分の清流鏡川を眼下にし、美しい自然につつまれた人情豊かな鏡へどうぞお越しくださいませ。

（たかはしすがこ／鏡地域婦人会会長）

高知街ラ・ラ・ラ音楽祭は「お祭り」です

吉澤 文治郎

二〇〇一年の春頃、故堀田昌一郎さんと私は、高知の街とよさこいの現状について、お酒を飲んでは熱く語り、憂いていました。その昔、よさこいに初めて生バンドを導入し、正調「よさこい節」ではない音楽を素晴らしいノリで演奏して、高知らしい自由なお祭りとして劇的に発展するきっかけをつくったのが「青果の堀田」チームです。堀田昌一郎さんは、その現場に立ち会った人物です。この「何でもあり」のよさこいをこよなく愛していました。私も音楽を通じてよさこいと深く関わりを持ってきましたが、自由な、踊るヒトも見るヒトもその周囲のヒトも皆が一緒に楽しめるよさこいが大好きでした。

ところが当時のよさこいは「よさこいソーラン」の影響を受け、どこのチームも演劇風の「ドコドコドコドコソイヤ！」みたいなショー的要素の濃いものばかりになって、「お祭り」というより「観光のための見せるイベント」のようになっておりました。高知の観光振興のためには、よさこいソーランを見習ってきちんとしたイベントとしての組み立てをするべきだ、などとシタリ顔で述べる者まで現れる始末で、僕たちは、そんなことではよさこいがイカンなる、と、酒を飲んでは悲憤慷慨していたのです。自転車の荷台にラジカセを積んで二人で踊ったチームが、ばかばかしい規制をかけられて出られなくなったとき、その怒りは頂点に達しました。

お祭りに、やっている人たちの「楽しさ」「遊び」が無くなったら、そのお祭りは衰退するしかありません。やっているヒトが楽しいからお祭りは発展するのであって、その逆は絶対に無いのです。

二〇〇一年冬、僕たちは、とある怪しいバーで、一冊のパンフレットに出合います。国体関連の視察で仙台市を訪れた方が持ち帰った、「定禅寺ストリートジャズフェスティバル」のパンフレットです。仙台の街中に数十の野外特設ステージをつくり、何百ものバンドが演奏を繰り広げるお祭りでした。

今でも、堀田さんの、「これや、文ちゃん、これを高知でやろう！」と言った顔が忘れられません。演（や）るヒトも、見るヒトも、通りがかりのヒトも、そしてスタッフや関係者もみんなが一緒になって楽しめる「お祭り」を取り戻そう！　という熱い想いが我々の胸に溢れてきました。

知り合いに声をかけ、音楽を、街を愛する人たちを集め始めます。実行委員会の運営で一番心がけたのは「思いっきり楽しむこと」。まずは関係者が楽しまないことには、絶対に楽しいお祭りにはならないことを確信していたからです。そうやって二〇〇二年秋、第一回の高知街ラ・ラ・ラ音楽祭が開催されました。

やってみて思ったこと。それは、「これは楽しい！」「おもしろいことになりそうだ！」でした。そして、「楽しそうなことやりゆうねえ」と、どんどんヒトが集まり始め、みんなの想いに後押しされる形で、毎年開催することになり、どんどん賑やかに、盛大になっていったのです。

僕たちが目指すのは「お祭り」。「お祭り」の基本は関係者が思いっきり楽しむこと。ラ・ラ・ラには、そんな想いが溢れているのです。

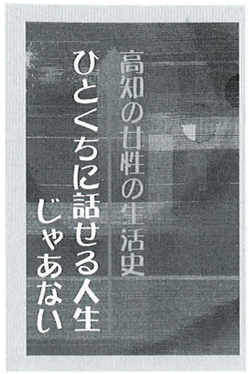
（よしざわぶんじろう／ひまわり乳業株式会社代表取締役社長）

高知の女性の生活史
「ひとくちに話せる人生じゃあない」はこうしてできた

～女たちの歴史を編む～

〈連載第３回〉

高知女性の生活史作成実行委員会



「高知の女性の生活史　ひとくちに話せる人生じゃあない」

地域を歩いて聞き取りをしてー

筒井征子

「南国・香美に頼めそうな人だれかおらん？」

古谷館長からの電話。「女性史を考える意見交換会」を経て実行委員会を立ち上げることとなり、人探しがスタートした。仕事仲間から頼めそうな人に押しの一手で頼み込み「わたしでできることやったら」と了承をとりつけ、やっとほっとする。

やがて実行委員会が立ち上がり、いよいよ女性史作成への活動が開始された。県下を七ブロックに分けた中の、私は、土佐市・吾川郡の町村と仁淀村の担当となり、聞き取り調査をしてくれる人探しがまた始まった。

仕事を通じて知った方や昔からの友人で、物書きが好きそうな人、女性史に興味を持ってくれそうな人を思いめぐらし、電話で、また訪ねていって趣旨を伝え、お願いに回った。聞き取り者もできるだけ多様な職種の人の方が人生経験も多様で、話者の話の中で感動する場面が異なるのではとの思いで人探しに当たった。

お願いに上がっても断られることもあり、困って仕事仲間を訪ね紹介をしてもらったり、また行政の女性対策の担当部署なら紹介してくれるかと、ソーレからの文書を持参してお願いに上がったが、「個人情報になるので人の紹介はできない」と断られ、残念な思いもした。

仕事がとても忙しい方に「もう頼む人がいないので嫌と言わず引き受けてや」とお願いすると「その話、私とても興味がある。話を聞いてみたい人がいるので是非やらして」との返事。また一面識もない方が、電話一本で「私も聞き取りをしてもらう年齢に近いけど、良かったらやらせてください」と引き受けてくださったり、いろいろありながらも、女性史に興味と関心のある方を期日までに探すことができ、聞き取り調査をスタートさせることができた。

聞き取りをお願いする時、「聞き取ったことを書いてくれさえすれば後はソーレが対応してくれると思うから、お願い！」と頼んだのだが、実際に作業を始めると、これが大違い。一次調査をして、その中からさらに詳しく聞き取る場面をメンバーで話し合い、また聞き取りにお伺いする。文章に落としながら「ここは？」と思ったら再度お伺いする。話者の了解を得てやっとの思いで提出したと思ったら、字数に限度があり、実行委員会で、この話者の思い入れの強い部分はどこか検討の末、また、聞き取り者に修正をお願いしなければならなくなる。車に乗れず、交通の不便な地域なので、三ヶ所に分かれて検討したり、全員で検討が必要な時は、一時間以上かけ、中心地に集まってもらったりと何回も何回も足を運び、ようやく完成に至った。聞き取る方、話してくださった方の思いと熱意で完成に漕ぎつけたと思っている。

三年間女性史作成にかかわったことで、すばらしい人生の先輩の話を聞けたことに感謝するとともに、人との出会い、つながりの大切さを実感する機会となった。

（つついせいこ／吾川ブロック担当）

地域を歩いて聞き取りをしてII

依光浩美

女性史作成のため、私は香美郡内の八十歳以上の女性四人の方にお会いし、お話をうかがった。

写真は、岩井純子さんと二人で島内幸さん宅を訪ねた時のもの。幸さんは、明治四十四年生まれの九十三歳だった。ここ数年は寝たきりということだったが、しっかりしておいでで、小さい頃のことなど、ハキハキと答えてくださった。

幸さん宅は、私の生家と同じ集落で若い頃の幸さんを私は知っている。コロコロと笑い声をたてながら楽しそうに話されるのは、ちっとも変わっていなかったのだが、一回目よりは二回目、二回目よりは三回目と、めっきり弱っていかれた。地主の家に生まれ、日本女子大で学ぶなど戦前は恵まれた生活を送っておられたが、戦後の生活は大変だったようだ。

聞き取りを終え、話をまとめた岩井さんは、幸さんの枕元でその文を読んで聞いていただいたそうだ。全部聞かれて幸さんは「ありがとうございます。光栄です」と言われたそうだ。

幸さんは、私たちが訪ねると大変喜ばれていろいろと話してくださったが、それは幸さんに限らず、他の方もそうだった。私は、自分の母から聞き取りをしたのだが、同じことを何回聞いても嫌がりもせずにニコニコと答えてくれた。

「浩美はいつ来るろう。まだ話ちゃあせんことがあるけんど」と、待ってくれることもあった。あれこれ聞くことで、昔のことをあらためて思い出したようだった。

島内幸さんと私の母島内亀代とは、近所同志で知り合いの間柄だった。戦前は、幸さんは地主、母は小作人だったが、戦後の農地改革は、二人に大きな生活の変化をもたらしている。幸さんは「太宰治の『斜陽』ですよ」

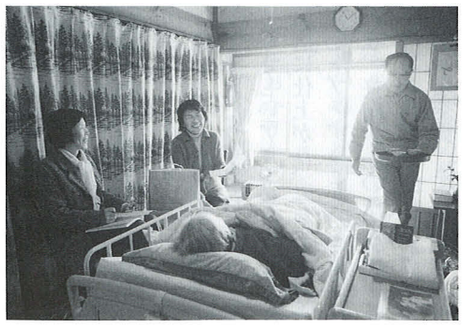
と言われ、「もう、めちゃくちゃ」と言われた。母は、農地改革についてはこう言った。

「まっこと、あんなことをようしたもんやねえ」と。この大きな改革については、当時の母にとって、いや多くの人々にとって想像もできなかったことだったのだろう。戦後は価値観が大きく転換し生活も激変。物不足、金不足の中ほんとうに大変だったのだと、つくづく思った。そして、二人とも「戦争は、もう絶対せられん」と言い、そのことについては全く同じ思いだった。

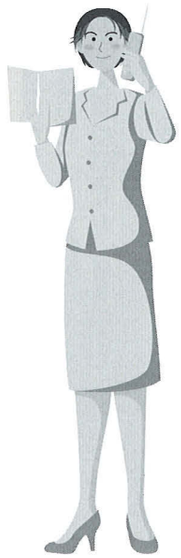
親子として長い間生きてきたのに、私は、母の過去、母の思いなど、あまりにも知らなかったことに驚いた。母や祖母たちの歴史に耳を傾けることの大切さを感じた。聞き取りの中で聴いた生の声は印象深く、ひとこと、ひとことが私の心に残っている。

（よりみつひろみ／香美ブロック担当）

取材を進めるうちに、香美ブロック独自の冊子を作ろうという動きが起こり、『香美の女たちが語る こんなこともあったぞね』（香美郡女性生活史作成の会）が発行された。



ベッドの島内さんからお話を聞き取る岩井さん（左端）と筆者（中央）。



ロハスと私

笹岡里圭

私の営む小さな小さなナチュラルカフェは、ササズロハスという名前です。お客様に「ロハスって何ですか?」とよく聞かれます。

これから、私がロハスに辿り着くまでのいきさつと、ロハスについてお話したいと思います。

五年前までの私は、ロハスとは程遠い毎日でした。二十四歳の頃に通信関係の会社を起業し、経営、結婚、二人の息子の出産、育児、家事、離婚、と二十九歳まではもう何がなんだか必死という生活でした。

そんな二十九歳の秋、昔の知人から聞いた「歯磨き粉って危ないの知ってた?」というフレーズが、私の生き方を百八十度変えることになりました。今でこそ、「経皮毒」という言葉が本になり、社会現象化してきましたが、五年前の私には、「危ないってどういうこと?」という疑問符がいっぱいの状態でした。でも同時に「子どもたちを危険にさらす訳にはいかない!」という強い思いを持ち、日用品の危険性を調べ始めました。

便利さと引き換えに私たちは(特に子どもは)有害化学物質に、知らされていないため、知らないために、理不尽にどんどん蝕まれていることが解りました。

これは、由々しき問題だと感じた私は、安全な日用品の海外通販の企業と出合い、その企業の理念と通販の方法を伝えていく仕事を始めました。

経皮毒に気をつけることで、家族や周りの方々の免疫力が上がり、驚くことがたくさん起こり始めました。

その頃、高知市内で小児科と内科のクリニックを開業されているドクターと出会いました。二十年以上前から食の危険性、心のあり方を地域医療に根ざして講演されてきたドクターは、食の乱れと経皮毒と栄養不足とストレス、この複合で病気になるかならないかが決まってくると長年の経験から直感し、そのことを患者さんに知ってもらうために、クリニックの二階に予防医学研究室を開設し、室長として私を迎えてくださることになりました。

一年弱の間に二百人を超える患者さんに、生まれてきてから現在に至るまで、どんなものを食べ、日用品を使い、仕事をして、ストレスをうけてきたのか、栄養補給についてはどうだったかということを聞き、一人の患者さんに二時間かけて改善法をアドバイスするカウンセリングを続けました。

そうして、患者さんの歩んできた人生を聞かせていただいているうちに、病気になってから病院へ来るよりも、病気にならないための情報を知ることができる場所が必要なのではと思うようになりました。

その頃から、マクロビオティックのレストランのオーナーさんと親交が深まり「朝倉のほうに玄米菜食のお店がないから、できると嬉しいね」という話をするようになり、私の心の中でぼんやりとササズロハスの構想が芽生え始めたのでした。

こうして、日々の生活に追われ、未来の子どもたちや地球のことなどじっくり考えることのなかった私が、たくさんの方々とのご縁を通して、本物志向の人・物と出会い、共鳴しあいながら学ばせていただいて、なぜ生まれてきたのかという役割に気づかされ、活動してきたことが、ロハスという言葉で一つになり、ササズロハスオープンにつながっていったのでした。

たくさんの仲間の力を借りて手作りでできたササズロハスは、温かくてやさしいアットホームな雰囲気のお店に仕上がり、今年の四月十四日にオープンすることができました。

私、笹岡里圭の伝えたい(=ササズ)ロハスに出合っていただきたくて創った空間。それがナチュラルカフェ・ササズロハスです。

LOHAS(ロハス)とは「Lifestyles Of Health And Sustainability」(ライフスタイルズ・オブ・ヘルス・アンド・サステナビリティ)の略です。直訳すると「健康的で持続可能な暮らし方」で、堅苦しい感じがしますが、簡単にいうと「心と身体と地球に優しいライフスタイル」のことです。

自分自身の心と体と経済が健康であること、そのうえで次世代の子どもたちや地球のことを考えながら、楽しく♪暮らしていくということです。

大切なのは、この「楽しく♪暮らす」なんです。今まで、地球環境のこととなると、辛くて、我慢ばかりしなくちゃいけない雰囲気がありました。人はそんなに強くないので、楽しくないと長続きしないんですよね。

ロハスには、大まかに五つの提案があります。

① 持続可能な経済(再生可能なエネルギー・フェアトレード・都市緑化等)

② 健康的なライフスタイル(オーガニックフード・ナチュラルなコスメ、パーソナルケア、サプリメント等)

③ 代替ヘルスケア(自然治療・ホメオパシー・予防医学等)

④ 自己開発(ヨガ・フィットネス・自己啓発・能力開発等)

⑤ 環境に配慮したライフスタイル(エコグッズ・オーガニック製品・リサイクル・環境配慮住宅・エコ家電等)

この中のどれか一つでも興味があったり、体験したり、実践したりしている方は、もう既にロハスな人なんです。

この五つを無理をせず、バランスよく、自分が快適で楽しく暮らせるように自分らしくチョイスしていくことが、更なるロハスな人への進化ではないかと思います。

ササズロハスには、私なりのこだわりでセレクトしたロハスな情報やグッズが狭い店内のあちこちに並んでいます。

私は、ロハスなグッズに囲まれて、ナチュラルで肉・乳製品を使わない玄米菜食を食べていると、心がやわらかくなってきました。そして、身体の調子がすごーくいいのです。快眠快便、むくみも取れて、お肌もツヤツヤ、免疫力も上がり、気がついたら二ヶ月で六キロも体重が減っていました。

ロハスな生き方は、無理なくダイエットまでできるんですね。

自分の心と身体と地球のために優しい生き方をしていくことで、なりたかった自分になれる。それがロハスだと感じています。

自分のライフスタイルが変わっていくと、自分も快適、地球も、未来の子どもたちも快適、こんな素敵なことってないですよね。

今、私の毎日は、たくさんの仲間と、ササズロハスのお客様、玄米やお野菜や卵などの生産者の方々、そしていつも陰になり日向になりサポートしてくれる母、笑顔で応援してくれる息子たちへの、心からありがとうという感謝の気持ちで満ち溢れています。

そして、将来は玄米菜食が給食の、イギリスのサマーヒルのような(日本では和歌山のきのくに学園)生きる力を、自然と共存共生しながら学び育める学校を作ることが私の夢です。

大切な自分と地球と未来の子どもたちのために、これからもロハスと感謝の輪を広げていきたいと思います。

(ささおかりか/ナチュラルカフェ・ササズロハス・オーナー)

学芸員シリーズ⑲

先人の知恵に挑め！

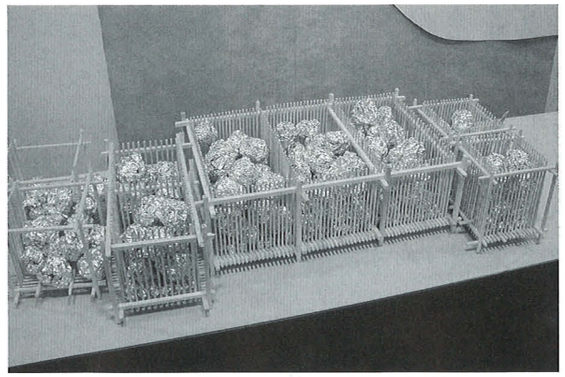
徳平　晶

天高く、馬肥ゆる秋――。秋になると騎馬民族が攻めてくるから気をつけろ、という意味の言葉であるが、時代と国を越えて現代の春野町立郷土資料館でも同様の意味で使われる。なぜなら、秋にはかつての騎馬民族のごとく、小学生が大挙して押し寄せてくるからである。

当館には野中兼山や兼山によってつくられた八田堰（はたぜき）、および町内にある弘岡井筋（ひろおかいすじ）（用水路）に関連する資料を所蔵・展示している。一方、県下の小学校ではそれらを教材とした授業を行っており、秋には八田堰や町内の用水路に関連した遺構を見て回る学校も多い。そのコースの中に当館の見学が入っているのである。そのため、この時期には小学生が連日「来襲」するが、当館としてはうれしい「来襲」であり、兼山や用水路の説明を行うなどの対応をし、大いに活用してもらってきた。

さて、本年も殺到する小学校の見学への準備をするなかで、今回は新たに木の枠に石を詰めていたという昔の八田堰の一部を簡易に復元して、当時の工法を説明しようという話が出た。模型をつくるという案は以前からあったが、問題もあった。それは、史料が皆無であるため、堰の構造や工事の方法が不明ということである。しかし、それらの解明のためにも実際につくることが必要と考え、枠の模型づくりに挑むことになった。こうして兼山や先人との知恵比べがはじまったのである。

ところが、実際に模型をつくりはじめるとさまざまな謎が浮かび上がってきた。例えば、木の組み方や設置方法、作業にかかる人数や時間などなど……。特に、機械を使わずに大規模な土木工事を行うことは現代人にはわからない感覚であり、それを実行するためにどのような知恵を使ったのかということは、さながら現代人に対する先人の謎かけのようでもあった。現代人としてその謎に挑んだものの、ほとんどは解明できず、先人との知恵比べには惨敗してしまった。しかし、模型製作を通じてわかったこともあり、そのときは先人の知恵に感心したり、知恵比べに勝ったような気になったりしたものである。



結局、枠は明治時代以降の史料をもとに、割り箸と竹串を組んだものにアルミホイルを丸めた大小の石を入れることで表現し、また不明なものは不明と断りながら、小学生にはその枠を使った説明を行っている。学校側からはまずまずの評価をいただいており、それはよかったと思っている。しかし、堰や用水路に関する謎は多く残っており、それらの解明のためにも、そして来館する小学生によりよい教材を提供していくためにも、先人の知恵に挑み続けていくつもりである。

ところで、当館では本年十二月五日から来年二月四日までの期間、中世に築かれた城をテーマとした企画展『春野の城　土佐の城　―中世城郭から高知城への歩み―』を開催するが、中世の城、特に山城は少ない工事で最大限の防御効果をあげるために、さまざまな工夫が随所にほどこされている。まさに先人たちの知恵が隠されているのである。この企画展ではそのような知恵を感じていただくとともに、城の構造や防御施設のあり方、城に込められた意味の解明など、先人との知恵比べにもぜひ挑んでいただきたい。

（とくひらしょう／春野町立郷土資料館学芸員）

高知市文化プラザ かるぽーと 9～10月の事業のご報告

◆山田章博展 ～幻想空間へのいざない～

七月十五日～九月二十四日、横山隆一記念まんが館で、第五回高知出身まんが家展として「山田章博展～幻想空間へのいざない～」を開催しました。

山田章博のデビュー二十五周年を記念して開催した本展では、まんが、小説装画・挿画、アニメ・ゲームのキャラクターデザインなど、多岐にわたる代表作の原画を中心に展示。繊細な筆致で描かれた美麗な作品群に、長い時間をかけてじっくりと鑑賞する人も多く見られました。前期・後期に分けてほとんどすべての作品の展示替えを行ったため、前期・後期とも訪れる人も多く、合わせて二、三三八人の来場がありました。

八月六日には、関連イベントとして「山田章博トーク＆サイン会」を開催。小ホールでのトークは二三〇席が満席となり、ユーモアを交えた気さくな語り口で、作家の人柄に触れる機会となりました。

◆No.5AREA数奇画展 ―上田奈保―

今年一月に実施した第一回美術作品コンクール最優秀受賞の上田奈保さんの作品展が八月二十二日㈫～二十七日㈰にかるぽーと七階市民ギャラリー第五展示室で開催されました。

会場には赤を基調に、受賞後描き上げた新作七点他が展示されました。

いずれも大作で、会場を訪れた鑑賞者はその大きさと独特の色彩感覚、エネルギッシュな画風、不思議な絵への困惑等、終始圧倒されっぱなしというような状態の緊張感あふれる企画展となりました。期間中、会場には約千人の入場者が訪れ、モチーフや独特の色の作り方、制作の意図など作家にさまざまな質問を投げかけていました。また今回の展覧会には、美術を志す中・高校生の姿も多く見られ、若い作家たちに大きな刺激を与えたようです。

◆ホリカワアートミーティング

九月二日、かるぽーとの前広場において、「ホリカワアートミーティング」を開催しました。

この事業はART NPO TACO（Tosa Arts Conference）と、文化振興事業団による共催事業で、前広場にある堀川を中心に、市民の皆さんに気軽にアートの世界を楽しんでもらえるような複数のプログラムを行いました。

メインとなった催しは、京都・東京を中心に活動を行うアートユニット、パラモデルによるワークショップ、「パラモデルと一緒にプラレールで遊ぼう」でした。広場をキャンバスに見立て、プラレールを使った絵をワークショップ参加者三〇名と共に創り上げました。

また、堀川沿いの並木道では、アートフリーマーケット「かるぽいち」を行いました。県内外で活動する作家約二十組による作品が川沿いの並木道を飾り、華やいだ空間を創り上げました。

この他にも「高知遺産ベストセレクション」の上映や、ピアニスト川村香絵さんと、映像作家の小倉りささんによるコラボレーションライブ「たこポート」も行われ、来場者は、思い思いにアートを楽しんでいただけました。

◆バーデン市立劇場オペラ「フィガロの結婚」

高知市文化プラザでは二回目となるバーデン市立劇場によるオペラ公演が九月二十七日にかるぽーと大ホールで開催されました。バーデン市はウィーン郊外の温泉保養地として栄え、数多くの音楽家たちが訪れ、作曲をしています。そんな本場の雰囲気を伝えるオペラの演目は、モーツァルト生誕二百五十年にちなみ『フィガロの結婚』を上演しました。

フィガロ、その婚約者のスザンナ、伯爵と伯爵夫人たちが繰り広げる恋愛模様をユーモラスに描き、最後は愛の真実を伝えて大団円となります。この著名な作品を、役者たちはテンポ良く演じ、生演奏のオーケストラと息もぴったりと合い、満場の観客も盛大な拍手を送っていました。

六月十日には、この催しの事前セミナーとして、解説書の監修者であるウィーン在住の杉本長史さんによる「ウィーン流オペラの楽しみ方」を、また八月二十九日には、モーツァルトのオペラ映画の上映会を開催しました。

やさしく結ぶ手に引かれ。

高知を撮る

第22回写真コンテスト入賞作品

結ぶ手

（平成17年　桑田山菊園）

高野　貞芳

「理科離れ」

「理科離れ」とは、もともと、理科に対する学生、生徒の興味、関心が低くなったことを意味することばであるが、最近では、社会の「理科離れ」が問題になりつつある。

社会でも、情報や自然科学の知識が要求される場面が多くなってきた。人々の科学的理解力が低下したり、専門的人材が不足したりするのは深刻な問題である。

理科離れ防止のため、生徒に自然を体験させたり、科学者が学校を訪問する試みなどがなされている。学校の「理科離れ」を防ぐことで、社会を「理科離れ」から守ろうという発想である。

ところが、最近、「理科離れ」の原因が、社会の「理科離れ」にもあるのではないか、と思わせる事例にぶつかった。

一つは、青色発光ダイオードを発明した中村修二教授の「日本は文系社会で、理系の人間は生きづらい。裁判などでも科学の分からない人間が判決を下す」という発言である。

もう一つは、理系の学生の就職に関する実例で、それは「霞ヶ関」では、最近でも、理系の人材は「技術畑」用として扱われ、行政用としては処遇されていない事実である。

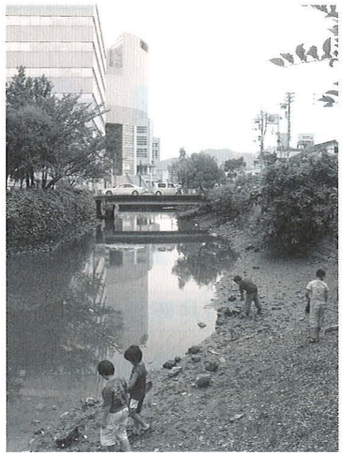
中村教授に言われてみると、なるほど我が国では、行政も司法も、文系が牛耳っている。文化面でも、日本とアメリカで、自然科学関係の雑誌の購読数は、人口一人あたりで一桁違うといわれている。

文系とか理系というのは、もともと、進学のための分類である。それが、いつの間にか、「文型」人間と「理型」人間を作り出す装置に変わってきたようである。

「文系社会」を是正する当面の方策として、行政分野に積極的に理系の人材を採用するとともに、司法では、理系の裁判補佐官のような制度を作ることも考えられる。

根本的には、受験制度を大改革し、高校で「文系」「理系」などに分けるのは止め、大学の、消滅寸前の、「教養」課程も再評価すべきであろう。

考えてみると、「理科離れ」問題の根は深い。たかが「理科」、されど「理科」とでもいうべきか？（路）



高知遺産

The Kochi Heritage 2006

最後の情緒・新堀川

この川に蓋をして道路にする計画が着々と進んでいる。こういう空間は渋滞が何パーセント緩和できるとか、経済に何パーセント貢献するとか、分かりやすい「指数」に置き換えることができない。だけど、なくなったら確実に子どもたちの遊び場が一つ減る。ふっと立ち止まってぼんやりできる場所が一つ減る。そういうことを表せる指数があれば、この川に蓋をすることはできなくなるかも知れない。（竹村直也）

風伯

『審問』辺見庸を読む

『自動起床装置』という作品で一〇五回芥川賞を受賞した筆者は、その後『もの食う人々』で強烈なアピールをされるとともに、山谷暮らしを体験したり、戦乱の世界を駆け巡りながら、傷ついて行く弱者の姿を伝えて、一匹狼の輝きを見せて居られたのだが、二〇〇四年、脳出血で倒れ半身麻痺となり、その上今度は腹部に癌が発見され、つい先月まで入院暮らしを余儀なくされていた。このたび毎日新聞社から発行された標記の本は、病院のベッドで、体の痛みに耐えながらパソコンのキーを打って纏め上げたものという。作品のテーマは多岐に亘る断片的な随想だが、その訴えはいずれも鋭く、容赦なく、鳥肌の立つものがある。「IT成金のなかには、この世で金で買えないものはないと言い放った青年もいたのですが～自分の精神のあらかたを資本に絡め取られているのでしょう。本質的な貧しさの自覚がない～」「～生産、労働、刻苦精励、終身雇用、労組、年功序列といった価値が退潮し～ギャンブル資本主義の時代を迎えた。人が生きることの内奥の重みや光が果たしてここにあるのか～」、文中から任意に抜き出した一節である。毒にも薬にもならない美文が横行する中で、氏の語らいは凄絶な文章を刻んで行く。（3）

MUSEUM SHOP
Kochi-City Culture Plaza CUL-PORT

Original goods Artist goods Ticket

かるぽーとミュージアムショップでは、横山隆一記念まんが館オリジナルグッズをはじめ、県内で活動を続けている作家の作品展示・販売、県下の文化施設で行われるさまざまなイベントのチケットを取り扱っています。

〒780-8529 高知市九反田２－１
高知市文化プラザかるぽーと３階
Tel 088-883-5052
毎週月曜休業（祝休日の場合は営業）

今号の表紙

「wooden deck tan/seesaa」

上村卓大

「雲を掴みに山へ登るクレイジーなクライマーにとってはゴアテックスもコンパスも何の役にも立ちません。だって必要な装備が何なのかさえ知らないのですから。

何かを表現したくても意味と物とを使って仮設的にしか置換することができないからこそ外在するものの抵抗感を頼りに作品は作られるのだと思います。」

（かみむら たかひろ／彫刻家）

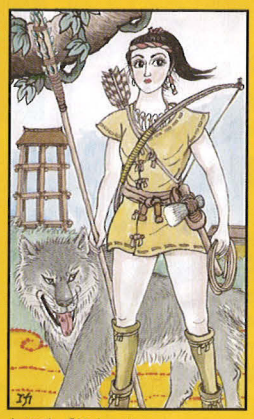
文化高知 No.134 2006年(平成18年)11月1日発行 [隔月発行]
財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5011(代表)/郵便振替01680-5-14869

龍馬学園創立20周年記念

矢野 徳・功 兄弟展

観覧料 無料

矢野徳 「心中立て」(『元禄遊女伝』より)



矢野功 「縄文の女」

開催中 ▶▶ 2006年12月3日(日)

9:00〜19:00(月曜日休館)

横山隆一記念まんが館 企画展示室

高知市出身でまんが家として活躍する矢野徳、功兄弟を取り上げる本展では、1コマまんが、小説挿絵、絵本など、それぞれの代表作の原画を中心に多彩な資料を展示します。「環境」「元禄遊女」「縄文の女」「しばてん」など、様々なテーマで描かれた個性あふれる作品群をお楽しみください。

主 催/学校法人龍馬学園・(財)高知市文化振興事業団 横山隆一記念まんが館

お問い合わせ先

〒780-8529 高知市九反田2-1高知市文化プラザかるぽーと内 横山隆一記念まんが館 TEL:088-883-5029 FAX:088-883-5049
URL:http://www.bunkaplaza.or.jp/mangakan/ E-mail:bunshin@i-kochi.or.jp

高知市文化プラザ活性化事業 第2回美術作品コンクール

Concours des Tableaux

高知市文化プラザでは昨年に引き続き、若手の美術作家を支援するために、作品コンクールを開催します。
これは「高知市文化プラザ活性化計画」に基づいて、芸術文化を創造する人材を積極的に支援・育成することを目的とする事業です。
フレッシュな感性、情熱あふれる作品をお待ちしています。

●審査員
長谷川祐子氏
(東京都現代美術館事業企画課長/多摩美術大学特任教授)

●対象
平面作品(壁面にかけられるもの)。書、写真は対象外。

●資格
県内在住あるいは県出身者で18歳以上35歳未満の個人(平成19年4月1日現在)。

●規格 260cm×260cm(枠・額を含む)以内の作品、2点まで出品可(未発表作品に限る)。
枠装、額装あるいは容易にワイヤー・フック等で壁面展示可能なもの(ガラス・アクリルの使用不可)。出品料無料。
※1) 展示作品の天災、不可抗力、いたずら等による損害について主催者は責任を負えません。
※2) 作品に水、生花等生ものの使用を禁止します。
※3) 枠装、額装などに不備のある作品は、受付できない場合があります。
※4) 展示後の作品は、加筆、撤去、配置替え等を行わないことを原則にします。

●日程
作品搬入:平成19年1月20日(土)・21日(日)9:00〜17:00
一般鑑賞:1月23日(火)〜28日(日) 高知市文化プラザ市民ギャラリー第1展示室
公開審査:1月28日(日)14:00〜16:00(表彰式16:00〜)

●賞
最優秀作1点賞金30万円、優秀作2点賞金各5万円を贈呈。
また、最優秀受賞アーティストは、受賞後概ね6ヶ月以内に市民ギャラリーにて、(財)高知市文化振興事業団主催の企画展を開催することができるものとします。

●応募方法
専用の申込用紙(高知市文化プラザをはじめ、県内文化施設にて配布中。またはホームページからダウンロード可)に必要事項を記入の上、作品の写真(制作中のものでも可)を添付し、1月10日(水)17:00までにお申し込みください(郵送・持参いずれも可)。これ以後も搬入日まで受付は行いますが、その場合には展示場所・目録掲載等に十分配慮できない場合があります。

●お申し込み・お問い合わせ先
〒780-8529 高知市九反田2−1
(財)高知市文化振興事業団「美術作品コンクール」係
TEL.088-883-5071